

日独イディオム比較対照

— “Zunge” と「舌」を
構成要素とするイディオム表現*） —

植 田 康 成

0 はじめに

以下において、ドイツ語における“Zunge”を構成要素とするイディオム表現と、日本語における「舌」を構成要素とするイディオム表現の比較対照を試みる¹⁾。ドイツ語イディオム学習・教授法にとって、何らかの示唆を得ることが目的である。

1 資料について

フリーデリヒ『現代ドイツ語イディオム辞典』(Friederich 1966)には、“Zunge”に関して38のイディオムがあがっている(S.561-563)。しかし“jemandem die Zunge herausstrecken”というようなイディオム表現は、“Zunge”を構成要素としていながら見出し語“Zunge”のもとではなく、動詞“herausstrecken”の項であげられている。そのため、ドゥーデン『ドイツ語イディオム辞典』の“Zunge”の項(DUDEN 1992: 839-841)を参照して、フリーデリヒの辞典に収録されていない表現を付け加え、データを補充した（【資料1】）。

日本語における「舌」を構成要素とするイディオム表現は、『成語林』から拾い出した。その数は、語頭および語中に「舌」を構成要素として含むイディオム表現両者を合わせて16である（【資料2】）。

2 資料の分類と観察

以下、収集したドイツ語および日本語の“Zunge”および「舌」を構成要素とするイディオム表現を、統語論的、意味論的、語用論的な観点から分類、観察することを試みる。

2. 1 ドイツ語における“Zunge”を構成要素とするイディオム

2. 1. 1 統語論的観点からの分類

(i) “Zunge”が主語となる：

(a) “Zunge”単独：

“böse Zungen behaupten”(3)²⁾

(b) 間接目的語を伴う：

“die Zunge hängt mir zum Halse heraus”(1)

(ii) “Zunge”が直接目的語となる：

(a) "Zunge" 単独：用例なし

(b) "Zunge" に形容詞が付加される：

"eine beredte(oder feurige)/ boshafte/ böse/ giftige/ falsche/ freche(oder lose)/ feine/ glatte/ scharfe/ schwere/ Zunge haben"(16-23)

(c) "Zunge" に所有代名詞が付加される：

"seine Zunge hüten" (14)

(d) "Zunge" が再帰動詞の目的語となる：

"sich die Zunge ausrenken" (7), "sich die Zunge abbrechen"(8)

(e) 間接目的語を伴う：

"jemandem die Zunge lösen"(12)

(iii) "Zunge" が間接目的語となる：

"der Zunge freien Lauf lassen"(24)

(iv) "Zunge" が前置詞句を構成する：

"das Herz auf der Zunge haben/tragen" (5)

前置詞の種類を上げると、"auf", "mit", "über", "von" の4つが確認できる。

2. 1. 2 意味論的観点からの分類

基本的には身体器官としての "Zunge" が持っている機能に基づいて意味が分化していると考えられる。すなわち、いわば第一次的機能として舌が持っている機能に参与している。この機能には、2つを区別することができる。ひとつは摂食行為に参与する器官として舌が持っている味覚を意味内容としている表現である(a-1)。もう一つは、次の第二次的機能にも関連しているが、呼吸に伴う空気の流れを調節する機能である(a-2)。舌の持っている第二次的機能とは、すなわち発声に関わる器官として舌が持っている機能である。この第二次的機能についても、さらに2つを区別することができるようである。すなわち、ことばを発するという行為そのものを指す場合(b-1)と、発言行為の結果として産出された発言を指す場合(b-2)である。それぞれに属する用例数を示すと次のようになる。

a-1):4、a-2):2、b-1):26、b-2):6

人間の生命活動を維持するという点では、摂食および呼吸活動に参与する機能がより重要であると考えられる。にもかかわらず、ことばの世界では舌の持っている第二次的機能に関連する表現が圧倒的に多いということは、人間が「話す動物」(homo loquens)であることを証するものといえよう。"böse Zungen" (口さがない人々) という言い方は、換喩的表現である。"mit gespaltener Zunge reden"(38)は、明らかに暗喩である。"sich die Zunge verbrennen"(13)については、"Zunge" が発言を意味するという点では暗喩的であるが、発言した人そのものが被害を被ったという意味では、換喩的でもあり、暗喩的でもある。

2. 1. 3 語用論的観点からの分類

イディオム表現の表現効果は、そのイメージ性にある。"genießberisch etwas nachempfinden"

あるいは単に"genießen"というよりも、"sich etwas auf der Zunge zergehen lassen"という方が、じっくりと味わっている様子が目に浮かぶ。そのような意味で、イディオム表現は、極めて感化的な意味を有しているといえる。

2. 2 日本語における「舌」を構成要素とするイディオム

2. 2. 1 統語論的観点からの分類

(i) 「舌」が主語となって述語（動詞、形容詞）を伴うもの：

「舌」 + 「が」 + 動詞：2³⁾

「舌」 + 「が」 + 形容詞：1

「舌」 + 副詞 + 動詞：6

(ii) 「舌」が目的語となって動詞を伴うもの：

「舌」 + 「を」 + 動詞：5, 8, 9, 10, 11, 12, 15

連用修飾語 + 「舌」 + 「を」：15

連体修飾語 + 「舌」 + 「を」：16

(iii) 「舌」 + 「の」 + 名詞：7

(iv) 「舌」 + 「名詞」 + 「に」：4, 14

(v) 省略的表現：3, 4

(vi) 複合語：

主語：13

目的語：5

連用修飾語：14

『成語林』から拾い上げた16の表現についていうならば、「舌」が語中に含まれている場合、そのほとんどが諺的な表現であった（たとえば、舌の剣は命を断つ、舌は禍の根等）。また省略的な表現があるというのも、日本語における特徴といえるだろう。「舌先三寸」は、本来は「舌（の）先（が）三寸（ある／だ）」であると考えられる。同様に、「舌三寸に胸三寸」も、「舌（が）三寸に胸（が）三寸」であると考えられる。助詞が省略されるのも、特に古い日本語にはしばしば見られる。イディオム表現は、過去の言語遺産という側面が強いからであろう。その典型が、諺ではあるが、「歌の返しせねば舌無き者に生まる」(17)という表現であろう。現在は、和歌を贈ったり、贈られた和歌に対して返歌をするなどということは、習慣としてはないといえる。過去の遺物的な表現といってよい。

2. 2. 2 意味論的観点からの分類

日本語の表現についても、上でドイツ語の表現についておこなったように、4つの観点から観察して、分類してみよう。すなわち、いわば第一次的機能として舌が持っている機能に関与しており、摂食行為に関与する器官として舌が持っている味覚を意味内容としている表現(a-1)と、呼吸に伴う空気の流れを調節する機能である(a-2)。そして、舌の持っている第二次的機能として、発声に関わる機能を考えることができる。さらに、この第二次

的機能に関して、ことばを発するという行為そのものを指す場合(b-1)と、発言行為の結果として産出された発言を指す場合(b-2)とを区別した。その数は次のようである。

a-1): 1、a-2): 5、b-1): 9、b-2): 1

この分類からあきらかなように、日本語においても、「舌」は第二次的機能を意味内容とするイディオム表現において多く用いられていると言える。これは、ドイツ語においても同じ傾向が見られた。ドイツ語と比較するとき目立つのは、発言行為の産出物としての発言を意味内容とする表現がひとつしかないということである。

2. 2. 3 語用論的観点からの観察

「舌鼓を打つ」(5)と「舌を巻く」(12)、「舌頭に千転する」(14)を除いて、それ以外はすべて否定的な意味内容を持っているようである。「舌尚存す」(6)や「舌を振るう」(11)、「三寸の舌を振るう」(16)にしても、中立的な表現というよりは、弁舌だけで世渡りをするということから、積極的な評価を含んでいるとは思われない。以上の6つを除いた残り10は、すべて否定的な価値判断を表現している。すなわち、饒舌、多言を戒める内容の表現である。この点において、第一次的機能よりも、第二次的機能に重点がおかれているといえる。いながらも、発言行為に対して、日本語はドイツ語とは逆の価値判断を表明している。

3 分類と観察に基づく考察

以上の分類と観察に基づいて、日独両言語における表現を比較してみよう。

統語論的には、両言語の言語構造が異なるので、比較対照は、それほど意味がないとも言える。しかし、いずれの言語においても、「舌」が目的語となって動詞と結合している表現が多いということが確認できる。日本語の「舌」+「を」という構造は、ドイツ語における"Zunge"が直接目的語となる構造とほぼ並行的に捉えることができよう。しかし、意味的にも重なっているというわけではない。

意味論の次元においては、次のことが言えるだろう。いずれの言語においても、身体器官としての「舌」が持っている第一次的機能に焦点を当てた表現は少ない。そのことは、とりわけ味覚器官としての「舌」について当てはまる。ドイツ語は $4/38=0.11$ 、日本語は $1/16=0.06$ という割合である。日本語においては、身体器官そのものとしての「舌」に焦点を当てた表現が $5/16=0.31$ となっているのが、ドイツ語との比較で注目に値するであろう。ドイツ語は、 $2/38=0.05$ となっている。いずれの言語においても、「舌」が持っている「第二次的機能」つまり、発言行為に関わる器官としての機能に焦点を合わせた表現が極めて多い。ドイツ語においては $26/38=0.68$ 、日本語においては $9/16=0.56$ となっている。割合からすると、ドイツ語の方が日本語よりもやや多いと言える。「舌」が発言行為の結果としての発言、ことばという意味で使われている表現は、ドイツ語では6、日本語では1となっている。両者合わせた割合を比較すると、ドイツ語では $32/38=0.84$ 、日本語では $10/16=0.63$ となり、ドイツ語の方が多い。以上のことから、ドイツ語の方が「舌」の機能

をより発言行為と関連づけて捉えているといえる。

両言語における表現を統語論的、意味論的な観点から比較対照してみよう。表現形式、意味内容ともに重なり合っているものは、"jemandem die Zunge herausstrecken"（誰かに向かって舌を突き出す）"sich die Zunge (ab-)beißen"（舌を噛んでしまう）の2つのみである。この後者の表現については、そもそも日本語に存在していた表現なのか、外来のものであるのか判然としないが、『成語林』には載っていないことからすると、外来のものである蓋然性が高い。"einen feurige Zunge haben"には、日本語においては「舌」そのものではなく、「舌端」を含む表現「舌端火を吐く」が意味的に対応している。この場合は、容易というわけではないが、理解が全く不可能というわけではない。部分的に重なり合っている表現であるといえよう。"mit gespaltener Zunge reden"は、日本語では「二枚舌」ということになると考えられるが、「二枚舌」という日本語そのものに対応する表現"Doppelzunge"や"doppeltzüngig"という表現は、1989年以後のドイツ統一へと向かう過程で一般にも知られるようになった。その他については、両言語における意味内容が異なっている。つまり、ドイツ語の「舌」を構成要素とするイディオム表現に、意味的に対応する日本語の表現には「舌」が含まれていないということである。あるいは、その逆も言えるということである。対応関係をまず、ドイツ語の方から見ていくことにしよう。

資料でドイツ語の表現に付してある日本語訳からわかるように、直訳しただけではその表現が持っているイディオムとしての意味を理解することは難しい。たとえば「非常に喉が渴いている」という意味では、日本語では、それ以外の表現法がない。せいぜい程度を強調するために「からからに」という連用修飾句を付加することができるだけである。また"böse Zungen behaupten"(3)や "jemandem die Zunge lösen"(12)のように、ドイツ語では「舌」を構成要素としている表現に、日本語では「口」が対応しているものがいくつかある。"eine freche (oder lose) Zunge haben"（生意気な口を利く）もそうである。あるいは"etwas liegt auf der Zunge"（喉まで出かかっている）のように、日本語では「喉」が関与している場合がある。"eine scharfe(oder spitze) Zunge haben"に対応している日本語の表現は、「舌鋒鋭い」あるいは「鋭い舌鋒」という表現であろう。この日本語の表現は『成語林』には収録されていないので、資料とはしていないが、日本語の表現からドイツ語の表現を思いつくのはそれほど難しくはない。

逆に日本語の方から見たときはどうであろうか。たとえば、おしゃべり、口数が多い、雄弁という意味の表現である「舌が長い」や「舌が回る」、「舌を振るう」、「三寸の舌をふるう」に対応する表現は、ドイツ語では"eine beredte Zunge haben" (16)ということになる。ドイツ語では"beredt"（雄弁な）という形容詞そのものが"Zunge"の前に付加されている。その意味では、日本語の方が換喩的な表現をしており、ドイツ語は暗喩的だといえる。どのような「舌」を持っているのか、「Zunge」の前にそれを限定する形容詞（beredte/ feurige/ boshafte/ böse/ giftige/ falsche/ freche/ feine/ glatte/ scharfe/ schwere）を付加すること

によって、さまざまな意味を表現している。ここで注意しなければならないのは、付加される形容詞が発言者の性格、性質に関わっているのか、発言された内容に関わっているかということである。そのいずれであるかは、"Zunge"が身体器官としての意味を持っているのか、発言行為、あるいは発言行為の結果産出された発言の意味で使われているのかに依っている。"eine falsche Zunge haben"は、明らかに発言内容に関わっている。他方、"eine feine Zunge haben"は当該の味覚器官としての「舌」を持った人の性質に言及している。

「舌鼓を打つ」は、暗喩的な表現であるが、ドイツ語では単一の動詞"schmatzen"を対応させるしかない。ほとんどの日本語の表現は、ドイツ語ではパラフレーズ式に表現するか、説明的に表現していくしかないということになる。あるいは「舌」とは関係のない表現を用いることになる。

語用論的な観点から比較対照してみるとどうか。日本語の言い回しは、上述したように、ほとんどが饒舌、多言を戒める内容の表現であった。それに対して、ドイツ語の場合はどうであろうか。饒舌、失言を戒める言い回しは、筆者の判断によると、"sich die Zunge ausrenken"(7)や"sich die Zunge verbrennen"(13)、"mit gespaltener Zunge reden"(38)等9つである。生命維持に関わる身体器官としての「舌」が持っている第一次的機能に関する表現を除けば、ほとんどの言い回しは、多くを話すことを必ずしも否定的には捉えていない。逆に"jemandem die Zunge lähmen"(11)や"etwas schwebt jemandem auf der Zunge"(28)のように、話せないことを否定的に捉えている表現さえ存在している。言説、話すということに対する文化的な捉え方の違いがイディオム表現にも現れていると言えるだろう。摂食行為の機能にのみ焦点を合わせた「口」を意味する語はないが、「口」が持っている発声器官としての機能に焦点を合わせた"Mundwerk"という語がドイツ語には存在していることが思い起こされる。

4 まとめ

以上、「Zunge」(舌)を構成要素とする日独のイディオム表現に関して比較対照を試みた。筆者が構想する日独イディオム比較対照が、身体部位名を構成要素とするイディオム表現についてはどのようなものとなり得るのかは、提示しえたのではなかろうか。「舌」以外の身体部位名を構成要素とするイディオムに関する比較対照研究は、将来の課題として残されている。

最後にウィットを一つ掲げて、「Zunge」と「舌」を構成要素とするイディオムに関する本論考を終えることにしたい。

"Kennen Sie die ostdeutsche Nationalspeise?"

Gedämpfte Zunge. " (Kunz 1999: 197)

(東ドイツの国民食を知っているか?)

蒸した舌だよ。⁴⁾

5 注釈

*)本論考は、「日独イディオム対照研究」の研究課題(一般研究(c)、課題番号:06610462)で平成5、6年度に交付された科学研究費補助および「政治的カリカチュアを素材とするドイツ語イディオム学習・教授法に関する基礎研究」の研究課題(基盤研究(C)(2)、課題番号:10610499)で平成10、11、12年度に交付された科学研究費補助による研究成果の一部である。ご多忙中にもかかわらず、原稿に目を通され、コメントを下さった古浦敏生先生にお礼申し上げます。

1)以下でおこなう比較対照および考察の視点、方法については、小林の論文(小林 2000)を参考にしている。ここにその旨を記して謝意を表する次第である。小林の論考は、スペイン語と日本語における身体部位名を構成要素とするイディオム表現を、五感を代表するもの5つ(目、耳、鼻、口、手)に限定して、比較対照し、考察したものである。日本語とスペイン語の目、耳、鼻、口、手に関するイディオム表現を、その統語論的構造と機能の観点から分類している。さらに、名辞論的および意義論的観点から比較対照し、スペイン語学習における留意点について言及している。小林が採った方法は、日独イディオム比較対照にも適用可能である。もちろん、以下において展開される考察そのものは、小林の論とは異なる。

なお小林の論では、味覚を口に代表させているが、筆者は「舌」の方がもっと深く味覚に関与していると考える。もちろん摂食行為において「口」はなくてはならないものではあるが、味覚自体に関しては「舌」のほうがより大きな役割を果たしている。「口」は、呼吸活動の目的である酸素をふくむ空気および栄養物の取り入れ口であり、発話の主たる出口としての機能を担っていると考える。

2) ()内の数字は、【資料1】の用例番号である。

3) この数字は、【資料2】の用例番号である。

4) "gedämpft"という語は、"dämpfen"という動詞の過去分詞であるが、"dämpfen"は、「蒸す」という意味の他に、「声をひそめる、押し殺す」という意味もある。"dämpfen"という語の二義性が落ちとなっている。

6 参考文献

尾上兼英 [監修] 『成語林』 旺文社、1992年

小林 2000: 小林和世「日西対照研究—身体部位名称を用いた表現を資料として—」『ニダバ』(西日本言語学会) 第29号、58-67頁。

DUDEN 1992: DUDEN 11 Redewendungen und sprichwörtlichen Redensarten. Idiomatisches Wörterbuch der deutschen Sprache. Mannheim/Leipzig/Wien/Zürich: DUDENVERLAG.

Friederich 1966: Wolf Friederich, Moderne Deutsche Idiomatik. Systematisches Wörterbuch mit Definitionen und Beispielen. München: Max Hueber Verlag.

Kunz 1999: Johannes Kunz, Selten so gelacht. Das 20. Jahrhundert in Witz und Anekdote. Wien: Molden Verlag.

【資料 1】 ドイツ語における "Zunge" を構成要素とするイディオム表現：

1. die Zunge hängt mir zum Halse heraus: ich bin außerordentlich durstig, erschöpft (舌が出て喉まで垂れ下がっている：非常に喉が渴いている、疲れ果てている)
2. jemandem klebt die Zunge am Gaumen: jemand ist sehr, sehr durstig (舌が上顎にくっついている：非常に喉が渴いている)
3. böse Zungen behaupten: schlechte, verleumderische Menschen sagen (意地悪な舌が主張する：口さがない人々が言っている)
4. die Angst bindet jemandem die Zunge: jemand kann vor Angst nicht sprechen (心配が舌を縛り付けている：心配で話すことができない)
5. das Herz auf der Zunge haben/tragen: alles aussprechen, was einen bewegt; offenherzig, zu gesprächig sein (DUDEN 1992: 328-329) (舌の上に心臓を持っている：心動かすこと、何でも話す、打ちあけて話す)
6. jemand würde sich eher die Zunge abbeißen (als daß er etwas sagt): jemand sagt (oder verrät) gar nichts (当該のことを話すぐらいなら、むしろ舌を噛むだろう：何も話さない、漏らさない)
7. sich die Zunge ausrenken: pausenlos reden (舌をはずす：絶え間なく喋る)
8. sich die Zunge (ab-)brechen (bei einem Wort): ein Wort ist unaussprechbar schwierig (so daß man sich fast die Zunge verletzt) (ある語を言おうとして) 舌を破る：ある語は発音が難しいので、舌を傷つけそうになる)
9. sich die Zunge aus dem Hals rennen: bis zur Erschöpfung rennen (DUDEN 1992: 840) (喉から舌が抜けそうになるぐらい走る：くたくたになるほど走る)
10. jemandem /nach jemandem die Zunge herausstrecken: jemanden durch Zeigen der Zunge [schadenfroh] verhöhnen](DUDEN 1992: 840) (誰かに向かって舌を突き出す：舌を見せて誰かの失敗をあざ笑う)
11. jemandem die Zunge lähmen: es jemandem unmöglich machen zu sprechen (舌が麻痺する：話せなくなる)
12. jemandem die Zunge lösen: 1) jemanden durch Wein zum Reden bringen 2) jemanden durch Gewalt dazu bringen, Aussagen zu machen (舌を解き放つ：1) ワインを飲ませて喋らせる、2) 力づくで口を開かせる)
13. sich die Zunge verbrennen: sich den Mund verbrennen (舌をやけどする：失言から禍を招く)
14. seine Zunge hüten (oder wahren, zügeln): vorsichtig sein mit dem, was man sagt (舌を守る (動かさないでいる、手綱を締める)：発言に注意する)
15. seine Zunge im Zaum halten (oder beherrschen) können: nur das sagen, was man sagen will (舌を囲いの中においておく (支配する) ことができる：言おうと思うことだけを言う)
16. eine beredte (oder feurige) Zunge haben: (sehr) beredt, redegewandt sein (饒舌な (火のような) 舌を持っている：非常におしゃべりである)

- 17.eine boshafte (oder böse, giftige) Zunge haben (悪意のある (意地悪な、毒のある) 舌を持っている)
- 18.eine falsche Zunge haben: Falsches sagen, lügen (偽りの舌を持っている : 偽りを言う、嘘を言う)
- 19.eine freche (oder lose) Zunge haben: ein freches Mundwerk haben (生意気な (緩んだ) 舌を持っている : 生意気な口を利く)
- 20.eine feine Zunge haben: ein Feinschmecker sein (洗練された舌を持っている) : 美食家である)
- 21.eine glatte Zunge haben: geschickt, schmeichelnd, nicht ohne Lügen reden (なめらかな舌を持っている : ことば巧みに、お世辞をならべたてる)
- 22.eine scharfe (oder spitze) Zunge haben: Kränkendes, Verletzendes sagen (鋭い (尖った) 舌を持っている : 人の心を傷つけることを言う)
- 23.eine schwere Zunge haben: 1)nicht leicht formulieren können 2)angeheitert sein (重たい舌を持っている : 1) ことばを述べるのが容易でない、2)お酒が入ってろれつが回らない)
- 24.der Zunge freien Lauf lassen: frei, ungehemmt reden (舌に自由な動きを与える : 自由に、言い淀むことなく喋る)
- 25.etwas auf der Zunge haben: etwas sagen wollen, dann aber doch nicht sagen (舌の上に持っている : 何かを言いたいと思っていながら、言わない)
- 26.etwas brennt jemandem auf der Zunge: es drängt jemanden, etwas zu sagen (DUDEN 1992: 840) (舌の上で何かが燃えている : せつつかれたように何かを言う)
- 27.etwas liegt auf der Zunge: 1) etwas fällt jemandem nicht ganz ein 2) jemand will etwas sagen, unterdrückt es aber (舌の上にある : 1)言おうとすることが思い浮かばない、2)言おうと思ったことを押さえる)
- 28.etwas schwebt jemandem auf der Zunge = etwas liegt jemandem auf der Zunge (1) (舌の上で漂っている = 言おうと思っていること全部は思い浮かばない)
- 29.sich etwas auf der Zunge zergehen lassen: genießerisch etwas nachempfinden (舌の上でとろけさせる : 感触を楽しみながら味わう)
- 30.sich auf die Zunge beißen: etwas nicht sagen, was man fast gesagt hätte (舌を噛む : ほとんど言い掛かっていたことを言わない)
- 31.sich jemandem auf die Zunge drängen = sich jemandem auf die Lippen drängen (舌の上に押し迫ってくる = 唇の上に押し迫ってくる : 今にも口に出しそうになる)
- 32.jemandem etwas auf die Zunge legen = jemandem etwas in den Mund legen (1,2) (舌の上に何かを乗せる = 口の中に何かをおく : あることを言うようにし向ける)
- 33.etwas mit tausend Zungen predigen: etwas immer wieder nachdrücklich sagen (何かを千の舌で祈る : 繰り返し強調する)
- 34.etwas nicht über die Zunge bringen = etwas nicht über die Lippen bringen (舌を越すことがない = 唇を越すことがない : 口に出さない)
- 35.jemandem glatt (oder leicht) von der Zunge gehen = jemandem glatt von der Lippe gehen (舌からなめらかに (容易に) 出ていく = 唇からなめらかに出ていく : べらべら喋る)

- 36.jemandem schwer von der Zunge gehen: 1) (Fremdsprache) nur mit Mühe gesprochen werden 2) nur mühsam formuliert werden (舌からなかなか出ていかない: 1) (外国語を) 苦労して話す) 2) 苦労して話す
- 37.jemandem das Wort von der Zunge/Mund nehmen: genau das sagen, was jemand gerade selbst sagen wollte (DUDEN 1992: 816) (誰かの舌/口からことばを取る: まさに誰かが言おうと思っていたことを言う)
38. mit gespaltener Zunge reden: lügen, zweideutig reden (DUDEN 1002: 669) (分裂した舌で喋る: 嘘を言う、二義的に喋る)

意味的観点からの分類

a-1) 1,2,20, 29[4]、**a-2)** 9, 10, [2]、**b-1)** 3, 4, 5, 6, 7, 8, 11, 12, 14, 15, 16, 21, 23, 24, 25, 26, 27, 28, 30, 31, 32, 33, 34, 35, 36, 37[26]、**b-2)** 13,17, 18, 19, 22, 38 [6]

【資料2】日本語における「舌」を構成要素とするイディオム表現:

1. 舌が長い: べらべらとよくしゃべる、口数が多い
2. 舌が回る: べれべらとよくしゃべる、弁舌がたくみである
3. 舌先三寸: うわべのことばだけで、心や中身がともなっていないこと
4. 舌三寸に胸三寸: 口から出るちょっとしたことばと胸の内のちょっとした考え
5. 舌鼓を打つ: おいしいものを舌を鳴らして食べる
6. 舌尚存す: 舌がまだある。舌さえあればだいじょうぶ、なんだってできるということ
7. 舌の根の乾かぬ内: 言い終わるか終わらないうちに
8. 舌を出す: 当人に見えないところで、そしったりあざけったりするしぐさ、失敗したときなどに軽くするしぐさ
9. 舌を出すのも嫌い: 舌を出すのもいやだというくらいに、徹底的に出ししぶるさま
10. 舌を鳴らす: 不満や軽蔑の気持ちを示す動作にいう、感心したりするときの動作にいう (舌打ちをする)
11. 舌を振るう: 熱心にしゃべる、雄弁をふるう
12. 舌を巻く: 口が利けなくなるほど、非常に驚いたり感心したりする
13. 舌端火を吐く: ことば鋭く論じたてるさま
14. 舌頭に千転する: 繰り返し何度も口ずさむ
15. 陰で舌を出す: その人の前では、お世辞などと言って相手にとりいりながら、その人のいないところでは、悪口をいったり、馬鹿にしたりするたとえ
16. 三寸の舌を悼う: 雄弁をふるう

意味的観点からの分類

a-1) 5 [1]、**a-2)** 7, 8, 9, 10, 15 [5]、**b-1)** 1, 2, 3, 6, 11, 12, 13, 14, 16 [9]、**b-2)** 4 [1]